nov. (C & D). A & B: Radial sections showing pith with large cells. C & D: Radial sections showing pith consisting of ordinary size of cells. A: ×28, B-D: ×75.

*　　*　　*　　*

前報（西田・西田 1984）にひきつづいて，傷害樹脂道をもったスギ科の材 *Taxodioxylon* の4種，*T. albertense, T. pseudoalbertense, T. nihongii* および，*T. paranihongii* を報告する。後の3者は新種である。

北海道各地の上部白亜系からは傷害樹脂道をもったスギ科材が多数産出する。材の太さはさまざまで，小さいものは径 10 mm 以下のものもある。材構造は基本的には同型で，それぞれ樹幹（*T. albertense*），枝（*T. pseudoalbertense*），小枝（*T. nihongii, T. paranihongii*）という関係が推定される。西田・須藤（発表準備中）は *T. albertense* に近縁といわれている *Sequoia sempervirens* について樹幹，枝，小枝における放射組織の高さと樹齢との相関を調べ，上述のよう推定できると考えた。*T. albertense* の放射組織は50細胞高以上になり，*T. pseudoalbertense* では20細胞高止り，*T. nihongii* と *T. paranihongii* では主に1-5細胞高である。後2者は材構造が全く同じで区別できないが，髄中の巨大細胞（分泌細胞?）の有（*T. nihongii*），無（*T. paranihongii*）により，はっきり区別できる，*T. albertense* と *T. pseudoalbertense* は髄を欠くので，*T. nihongii, T. paranihongii* のどちらと同じであるかわからない。傷害樹脂道をもった北海道産の *Taxodioxylon* は形態上は4種，実質的には2種あると思う。

□横浜康継：**海の中の森の生態（海藻の世界をさぐる）** 247 pp. 1985. 講談社，東京. ¥640. 日本は食べられる海藻の生態や生理の研究は盛んで，世界の先導的役割を担っているが，食べられない，一見役に立ちそうもない海藻の研究となると，欧米に比べてお粗末である。横浜氏は私達海藻を研究する者にとって清涼剤とも言うべき本を著わしてくれた。「ワカメは何色」「ワカメからわかめへの変身」と言った，私達に身近な存在を導入として，内容は「補色適応説」「光合成の測定」「海中の森と草原の光合成と生産量」へと進み，続いて「海草藻場の物質循環」「アワビやウニの住む森」で生態系を論じ，「失われる万葉びとの海」「巨大海藻の危機」などで自然保護を話題にする。著者はいつしか私達を海の中の森に誘い，意外と知られていない海藻の生活の一断面を理解させる。永年，臨海実験所に勤務し，海藻の生理，生態の研究に従事してきた専門家だけに，内容は正確である。基礎知識が充分でない者にも読みこなせる。海中牧場や栽培漁業の基礎生産者として，あるいは潜在遺伝子資源植物として，近年，大方の注目を浴びるようになった海藻に，生きざまの面から迫る入門書である。　　（千原光雄）